

万木カブ、ミブナの広うね散ば栽培法

吉澤 克彦*

滋賀県では水稲の早期栽培跡水田を利用して漬物原料野菜が多く栽培されているが、は種期が水稲の収穫期と競合することや秋雨で適期は種が行えず生産の安定や面積拡大を阻害している。そこで、麦作に準じた広うねとし、散粒機では種する栽培技術を赤カブとミブナについて検討した。

1. 方法

項目/年次	1992年	1993年	1994年
1) 供試品種	万木カブ	万木カブ	万木カブ、京福(ミブナ)
2) 試験区の内容	わら混入の有無、 耕起深 5, 10cm	収穫方法 (一斉、間引き)	は種量 (2,4,6dl/10a)
3) は種日	9月18日	9月17日	9月13日
4) 施肥量 (N-P-Kkg/10a)	28-20-26	37-27-34	26-18-25 (22-15-20, ミブナ)
5) 種子増量剤	ダイシストン粒 (4.5kg/10a)	細粒8-6-8 (4kg/10a)	細粒8-6-8 (4kg/10a)

- 6) うね幅：散ば区 5 m, 慣行区 1.25 m
- 7) 使用は種機：散ば区 まきっこ (電池式, 初田工業), 慣行区 ごんべえ (歩行型 1 条, 向井工業)
- 8) 散ば区のは種法：1 うね 4 回重複散ば

2. 結果および考察

1) 電池式散粒機のまき幅は 5 ~ 6 m あり、種子はうね全面に飛散し、は種量が多いとは種密度は高まったが、うねの部位により密度差が認められた。は種密度の平均値は万木カブでは 4 dl (10 a 当たり, 以下同様) 区は 2 dl 区の 2 倍, 6 dl 区は 3.6 倍で、ミブナでは 4 dl 区は 2 dl 区の 3 倍, 6 dl 区は 4.2 倍であった (図 1, ミブナのデータは略)

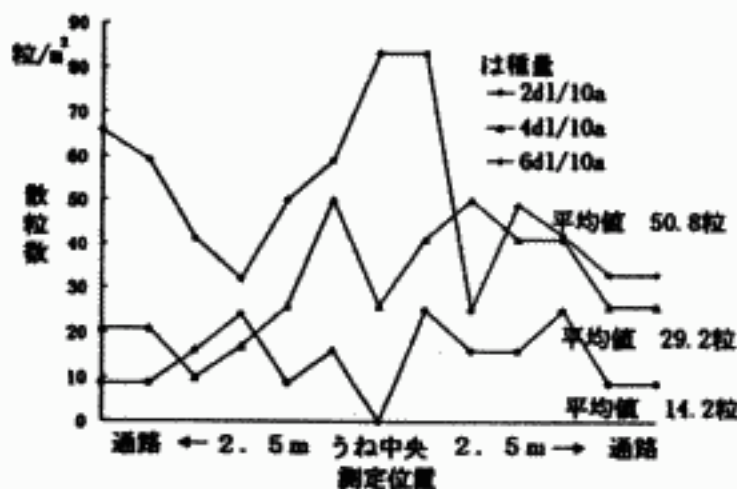


図1 は種量と 1 m² 当り散粒数 (万木カブ, 1994)

- 2) 万木カブのは種量と収量の関係は、2 dl 区では慣行区と同程度であった。は種量が多い場合には収穫期を遅らせると多収となったが、平均可販根重は低下した (図 2)。
- 3) 万木カブの広うね散ば栽培における稲わら混入の有無、耕起の深さの影響は収量 (重量) には認められなかった。また、間引き収穫による可販重量や平均可販根重の増加は認められなかった (データ略)。
- 4) は種後晴天が続く条件 (7 日間, 1992 年) では株密度が他の年度より低くなったが慣行区以上の可販重量を得た。一方、土壌水分過多条件 (61.3%, 1993 年) では慣行区が低収であったのに対し散ば区では 2 kg/m² 以上の可販重量を得た (データ略)。
- 5) ミブナのは種量と収量の関係は、2 dl 区では慣行区と同等の可販重量を得たが、4 dl 以上の区では、可販重量、可販重量率、平均可販株重とも劣った (データ略)。
- 6) うね立て、は種及び追肥の各作業では、慣行栽培に比べ大幅な省力化が図れる (表 1)。

以上の結果から、幅 5 m 程度の広うねに万木カブやミブナの種子を散粒機では種し、覆土や間引きを行わなくても十分な収量が得られる。10 a 当たりのは種量は万木カブでは 4 dl 程度、ミブナでは 2 dl 程度が適量である。また、本栽培法は省力・省略化される作業も多く、さらに降雨時は種も可能で、水稲との競合の緩和に有効で、大規模栽培に適すると判断される。

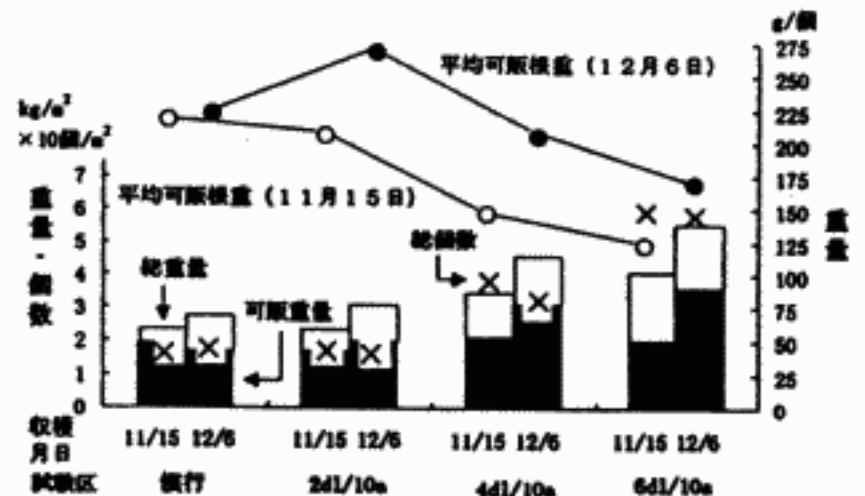


図2 は種量と根部収量 (万木カブ, 1994)

表1 広うね散ば栽培で省力化される作業内訳および降雨時の作業性

作業名	広うね散ば栽培	慣行栽培	備考
うね立て (分/10a)	12	46	広うね：長さ200m, 慣行：長さ800m
は種 (分/10a)	20	68	広うね：電動式散粒機で800m歩行, 慣行：人力は種機で1600m歩行
間引き (分/10a)	0	766	広うね：無し, 慣行：2回
追肥 (分/10a)	36	90	広うね：散粒機で葉上から3回, 慣行：人力で条間に2回
降雨時は種	可	不可	

注) うね幅は広うねでは 5 m, 慣行では 1.25 m. 慣行は 2 条播き. 作業時間は広うね 400 m², 慣行 100 m² に於ける測定値から換算.

* 平成 7 年 10 月 28 日 没